本実践・研究から見えてくること

研究協力者　中野　良樹
（秋田大学教育文化学部特別支援・こども発達講座）

―　２年・嶋崎実践　―

―静謐な発表会に満ちた自律の先の「生活化」―

本時「みんなのはっぴょうをきいて、おせわのしかたをくらべよう」では、ズッキーニ、ミニトマト（赤）、ミニトマト（オレンジ・アイコ）、キュウリ、ふうじんキュウリ、水ナス、パプリカ、丸オクラ、白オクラ、インゲンの計 10 グループが３分間で野菜のお世話と工夫を多彩な方法で発表した。同じ野菜でも品種でグループが違うのは、「自分だけの野菜」という思いの強さの表れだ。ナスの棘を拡大写真で見せたり、脇芽取りや肥料のあげ方を実演したり、朝咲いたズッキーニの花で受粉を見せたり。オクラグループは紙芝居を作ってクイズを出題し、パプリカグループは流行りの曲の替え歌で育て方を表現した。iPad を使ってお世話の仕方の自演動画を上映した子もいた。みんな精いっぱいの工夫と準備をして発表に臨み、他の子たちも静かに聞き入った。そんな粛々と進んだ 40 分間の発表会、見どころはどこだったのだろう？

本来、２B の子たちは発表会で自分たちも楽しみ、参観者たちも楽しませるのが得意だ。昨年の公開研では学校探検の報告会を開いた。その様子を私は紀要に「１B の『びっくりすてき発表会』で、子どもたちは自分で見つけた学校の『すてき』を巧みに発表し、見ていて本当に楽しく何度も笑いが起きた」と書いた。なぜ、今年は静かな発表会だったのか？十年前のある公開研を思い出した。２年生が２羽の烏骨鶏を教室で育てる単元だった。本時では教室前の草地に鳥たちを放し、子どもたちと鳥が交流する様子を期待した。だが、子どもたちは決して鳥に近づかず半径約２ｍで取り囲み、エサをついばむ姿をじっと無言で観察していた。なぜだろう？彼らは毎日交代で２羽を大切にお世話してきた。お互いがそれを理解していたから、むやみに近づかず見守ることに終始したのだ。この何も起きなかった提案授業を、招待講演者だった東京大の秋田喜代美先生は「あの静謐な空間から、子どもたちがどれだけ真剣な思いをもって２羽をお世話してきたか伝わってきた」と評された。そう、２B の子どもたちも１カ月間ずっと真剣に野菜のお世話をし、発表の準備をしてきたのだ。単元の開始当初は学年唯一の提案授業に向け、野菜がちゃんと育ってくれるか、虫がつかないか心配していた。寒さに弱い夏の野菜だ。公開研の時期は冷える朝も多く、弱って枯れてしまうことも多い。そこで、お手製のビニールハウスを作って野菜を冷気から守ったり、虫よけのアルミホイルを敷いたり、気温や天候に応じてこまめに置き場所を変えたり、自分で考え判断してお世話を続けた。そうした工夫の積み重ねは、いずれ２B の子たちにはあたり前の日常となった。そうして、ミニトマトはどれを間引くか困るほど実をつけ、長々と支柱に蔓を巻き付け小さな実をつけたキュウリ、高く広く葉っぱが繁ったナス、静かな発表会は自慢の野菜に溢れた。なかでも、インゲン、水ナス、ズッキーニの子たちは一人で野菜を育て発表に臨んだ。準備の２週間、一人で計画を練り、方法やセリフを考え、練習を積んだ。人前で話すのが苦手な子は、お世話の仕方の動画を先生にお願いして何度も撮り直した。ズッキーニを紹介した子は、本時の朝初めて開いた花をみんなに見せたくて急遽台本を手直しした。授業者の嶋崎先生は、どこまでも溢れる子どもたちの問いや願いに応えるため、道具や素材を準備し、工夫の手がかりになる本を揃え、野菜の成長を細かく写真に収めた。見取り、準備、支援に徹する姿勢が子どもたちの自律を促すからだ。

発表会後、黒板いっぱいに書かれたお世話の工夫を見くらべて、ある子が「サラダを作ればいい」と言うと、他の子たちは「いいねそれ！」と続いた。自律したお世話と工夫は生活の中で一人一人に定着し、それが発表会を通してみんなで共有する価値へとつながった瞬間だった。